

# 王の生と死をめぐる儀礼と法会文芸

堀河院の死と安徳帝の生

小峯和明

Rites and the Literature of Buddhist Memorial Services in the Life and Death of Emperors : Deaths at the Horikawa Palace and the Birth of Emperor Antoku

KOMINE Kazuki

- ① 問題の所在
- ② 描かれた堀河院の死
- ③ 大江匡房の堀河院追善願文
- ④ 安徳天皇の誕生をめぐる――出産儀礼の縮図
- ⑤ 『平家物語』から
- ⑥ 法会唱導、修法、事相書から
- ⑦ 御産記録めぐり

## 【論文要旨】

十二世紀（院政期）における天皇の生と死をめぐる儀礼とその記録や仏事儀礼に供された唱導資料（願文・表白）を中心に検証する。死に関しては堀河院をめぐる、関白忠実の日記や女官の日記、大江匡房の願文などから取り出し、とりわけ追善法会における願文表現の意義を追究した。生に関しては安徳天皇の誕生を例に、中山忠親の日記、『平家物語』諸本、安居院澄憲の表白、密教の事相書、御産記録等々から検討した。

## ①問題の所在

日本の前近代において生老死の儀礼をつかさどる担い手の中心は寺院教団である。それは葬式仏教といわれる今日でも変わらない。仏教儀礼は通常、「仏事」といわれ（現在は「法事」という語彙が一般化）、「法会」という場で行われた。仏事儀礼を実践し具現化する場が法会にほかならない。生と死の儀礼もまたこの法会を介して行われる。とりわけ古代から中世にかけて各権門がこぞって実施し、法会仏事は隆盛を迎える。国家的なものから私的なものに至るまで多種多様な法会が展開された。法会は寺院社会と世俗社会とを結ぶ要の場でもあり、盛儀の法会のために学侶たちの研鑽も重ねられた。寺院社会の集約、収斂するところに法会があったといつてよい。

近年、こうした法会をめぐる、歴史学、宗教学、民俗学、美術史、文学等々、さまざまな立場や角度から考究されるようになり、今や《法会学》といつてよい情勢となりつつある。その一環として文学研究の立場から《法会文芸》を提唱しているところであり、徐々に研究が集約してゆくことが予想される。ここでも王の生と死をめぐる、儀礼と《法会文芸》の観点から検討してみたい。ことに法会が隆盛を迎える十二世紀の院政期を焦点とし、記録が比較的残りやすい天皇の生と死を中心にみていこう。さしあたって、ここでは便宜上、堀河院の死と安德天皇の生をとりあげることにする。

## ②描かれた堀河院の死

堀河院は白河院の皇子でわずか八歳で即位、在位二十一年に及び、位についたまま二十九歳で没する。嘉承二年（一一〇七）七月十九日のこ

とである。その間、白河院が引き続き院政を敷いたのに対し、よくその専制をおさえ、和歌や管弦などの学芸に長じ、末代の賢帝の誉れ高かったが、惜しくも夭折する。いわゆる院政期という時代の画期となった王である。院政初期を代表する古記録、藤原宗忠の『中右記』には、しばしば堀河院を回顧賛美する記事がみえるし、大江匡房の『江談抄』をはじめ、一連の記述にもうかがえる。

堀河院のうせ給ひし時に、易筮せさせむとて、内裏に召たりしに、三位局にありしに、我があはんとていたりしかば、ゆゆしげにおろおろなる直衣きてありき。易筮のこと問ひしかば、「本より筮は不仕事也。復推仕り候。御心地は大事に御坐也。山を載せたる卦に逢はしめ給ひて候。人の山を載せたらむ許り、わびしきことやば候べき」。我云はく、「今朝御料をよげに聞こしめしたりつるなり」と云ひしかば、匡房云く、「病者は死期近くなりては物を食ふなり。身付きたる冥衆どもの、物をほしがるが候也。物食ふはなかなか悪しきことなり」といひき。案のごとく、その夕、崩せしめおはんぬ。

（新古典文学大系）

これは関白富家忠実が回想して語った言談を外記の中原師元が記録した『中外抄』にみる記事である。堀河院の臨終に呼び出された大江匡房が易筮の占いをあえてせず、忠実と対面、院が食事をとつたのは冥衆がとりついているため、死期が近い証拠だと予言、はたしてその日の夕方に亡くなる話。その日に匡房が召喚されたことは記録にみえないが、関白の忠実が院に近侍していたことは、堀河院付きの女房だった讃岐典侍の日記からも明らかである。その忠実の四十三年後の談話であり、信憑性は高いといえる。「ゆゆしげにおろおろなる直衣」という匡房の風体への印象がとりわけ強かったようだ。

これにあわせて匡房の談話筆録『江談抄』二・八には、堀河院の死をめぐる、帝王の在位年数と寿命にまつわる宿曜の秘説が展開されてい

る。「近代帝王及二十余年給宝位、希代之事也」とまでいう。院の運命が天の運行にかなっていたからだという。

匡房が堀河院の易箴にかかわっていたことは、同時代の宗忠の日記『中右記』康和五年（一一〇三）二月二十六日条にもみえる。

又江中納言被<sub>レ</sub>申云、「主上今年易箴御勸文見給之所、今年有<sub>二</sub>火事御慎<sub>一</sub>、□御膳御慎、有<sub>二</sub>熱病御慎<sub>一</sub>者。件旨奏聞之處、「早可<sub>レ</sub>申内也。至<sub>二</sub>火事<sub>一</sub>者、火災御祭如<sub>レ</sub>法可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行。御膳之条、能々可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>用心御<sub>一</sub>由、可<sub>レ</sub>奏」者。一々依<sub>二</sub>院仰<sub>一</sub>奏聞了。件易箴御勸文、慎等所勸也。以<sub>二</sub>其勸<sub>一</sub>令<sub>二</sub>見<sub>一</sub>江中納言也。（史料大成）

匡房が堀河院に関する易箴勸文を見、火事・御膳・熱病の卦があることを白河院に奏上、白河院が対策を奏聞させるといふもの。堀河院没の四年前であり、これに類することはしばしばあったに相違ない。

さて、堀河院が臨終に『法華経』を誦読していたことが『中右記』や『讃岐典侍日記』にみえる。前者では、七月十八日条と翌十九日条に、漸及<sub>二</sub>暁更<sub>一</sub>、主上念誦法華経方便品輿偈御、真御声頗以高（年来之間、欲<sub>レ</sub>暗誦法華経之御志深。仍第一二卷已令誦付給也）。主上辰刻許、御氣已断給也。但、先自唱<sub>二</sub>大般若法花経号并不動尊宝号<sub>一</sub>、次唱<sub>二</sub>釈迦弥陀宝号<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>西方<sub>一</sub>給、身体安穩只如<sub>二</sub>入<sub>一</sub>睡眠給也。

とあり、『法華経』第一、二巻を暗誦し、方便品の偈を唱えていたことが知られる。

後者の『讃岐典侍日記』にも、

方便品の比丘偈にかかるほどの長行をぞ読まるる。つくづくと聞かせたまうて、「衆中之糟糠仏威徳故去」といふところより、御声うちつけさせたまひて、つゆばかりがほど滞るところなく、ゆうゆうと読ませたまふ御声尊き。阿闍梨の御声、おし消たれてきこゆ。（略）あけくれ、一二の巻を浮かめさせたまふと、聞きおきたまへること

なればなめり。（古典全書）

堀河院の叔父に当たる醍醐の定海阿闍梨の誦経にあわせ、方便品の比丘偈を唱和したという。また、念仏も唱え、「南無平等大会講明法華」も口にす。

関白忠実の日記『殿曆』七月十九日条にも、寅時許、主上令<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>御冠<sub>一</sub>給。法華経を令<sub>レ</sub>読給、希有事也。（大日本古記録）

とみえ、院みずからの誦経が異例のことだったことが強調される。

院は生前に經典を書写していたことが『中右記』長治二年（一一〇五）正月二十八日条、つまり死の二年前にみえる。

今夕於<sub>二</sub>二間方<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>養御筆大般若経第二帙<sub>一</sub>、御尊師前律師齊尊云々。

「二間」は天皇のいる脇の部屋で、観音が安置してあった。同年九月十五日条にも、『大般若経』の第一巻端二枚許を書写したことがみえる。

さらに『讃岐典侍日記』には、臨終の床で関白忠実が堀河院自筆の『大般若経』の所在を尋ね、二間にあるのを聞いて、院に見せるくだりがあり、『中右記』の記述とかさなりあう。

殿、御顔にあてて、「仏を念せさせたまへ。書かせたまふと聞きまいらせし御筆の大般若は、いづこにかおはしますぞ。それをよく念じまゐらせたまへ」と申したまへば、「二間にこそあらめ」と仰せらるれば、殿聞きて取りてまゐらせたまふ。「これにや」など、見せまゐらせたまへば、「これなり」と仰せらるる。

院の臨終にたちあつた当事者でなければ知り得ない内容であり、このような王の最後が記述されること自体、すでに前代との認識の差異がはつきりうかがえる。院政期という時代の問題として定位することができるであろう。大江匡房の『続本朝往生伝』には、後一条院と後三条院の往生伝が語られ、『北野天神縁起』建久本には道真左遷の罪で醍醐帝

が地獄に堕ちたことが語られる。王の死の現場が詳細に描かれ、死後の世界が語られるようになる時代、そこには疑いなく禁忌の変質があり、院政期というあらたな時代認識をうかがうことができるであろう。

### ③大江匡房の堀河院追善願文

右にみたように、とりわけ堀河院の死は、臨終をまのあたりにした忠実や讃岐典侍、あるいは宗忠らによって細かく記録されたが、ここでさらにみるべきは、院の追善法会のために述作された大江匡房の願文である。

願文とは、仏事法会を主催する願主の祈願を綴った文章で、法会を開くにいたった経緯や目的、趣旨が説かれ、功德や救済を願う。法会の柱とってよい文章である。法会の場で表白に続いて法会を遂行する導師が読み上げ、聴衆の感動や悲嘆の涙を誘った。表白は導師が法会を開く意義や功德をたたえる文章で、法会の最も基本となる文章である。とりわけ願文は、日本では平安期に発展し、空海の『性霊集』や菅原道真の『菅家文章』などにも収載され、ことに『本朝文粹』収録のものが後代の規範となり、匡房の願文がこれについて後世におおきな影響を与えた。匡房の願文のいくつかは『本朝統文粹』に収録され、また院政期以降の法会唱導を領導した天台の安居院の澄憲・聖覚らの『転法輪鈔』『言泉集』にその摘句が多数引用される。

願文は中国に先例があり、その翻刻の一部は『敦煌願文集』にまとめられ、比較研究が試みられるようになった。日本では文人貴族が施主になりかわって述作、四六駢麗体の華麗な文章で法会を荘厳したのである。つとに『枕草子』に「文は願文」とあるように、当代の文章で重要な意義をもっていたにもかかわらず、近代にその意義は忘れさられ、漢文学からも仏教学からも等閑視される時代が長く続いた。近年ようやくその

意義が再評価され、研究が正統化されつつある。

大江匡房は院政期を代表する官僚学者で、その著述は質量ともにおびただしいものがあるが、とりわけ院政期の〈法会文芸〉の中核ともいべき『江都督納言願文集』は注目される。没後の編纂とおぼしいが、百数十篇を優に越えるもので、院政初期の法会の隆盛を直截に投影するテキストの集成として、生老死の儀礼研究にも必須の資料となるであろう。当代の天皇、院らをはじめ撰閲家や公卿から中流の貴族層にいたるまでの対象は広範囲にわたり、当時の権門体制を具現するものとなっている。その折々に実施された仏事法会の願文は法会の第一級の史料ともなる。

さて、当面問題にする匡房が書いた堀河院の追善願文は、没後六七日供養、七七日供養、一周忌供養の三篇あるが（『江都督納言願文集』）、煩を厭ってここでは七七日すなわち四十九日の供養願文のみとりあげる。詳細はすでに『院政期文学論』（笠間書院）に論じたのであるべく簡略にとどめたい。

堀河院の七七日法会は『中右記』や『殿暦』に詳しく、以下に概要を摘記しておく。

九月七日の辰刻、金色等身の釈迦三尊像を安置し、未刻に公卿や諸僧が参集、撰政忠実は痲病で遅参。申刻に鐘を打ち、公卿は左右に分かれて着座、諸僧百七人が着座。講師覚信・読師永実が高座に着、唄師が発声。散華師の先導で諸僧が行道、堂達が願文を導師に渡し、導師が開講を宣し、表白を読み、願文を読み上げる。ついで経を読み、諸僧唱和する。経は『法華経』金泥一部、素紙百部、『大般若経』一部六百卷である。堂達が諷誦文を講師に授け、ついで呪願文を授けて読み上げ、講師が説法、公卿らが諸僧に布施し、退出する。

以上、細部は省略したが、おおよそはこれで知られる。堂内の釈迦三

尊像を前に大臣公卿が左右に分かれて列席、講師・読師が高座につき、諸僧が行道、導師が願文を読み、誦経、誦誦文や呪願文を読み、説法に及び、公卿殿上人らが諸僧に布施をほどこす、というのが法会のおよその次第である。『中右記』には匡房が願文を書いたことが明記される。

大臣公卿殿上人の大半が列席し、百人以上の僧が参集、百部以上の經典が供せられる。院政期の豪華な儀礼を象徴する一大晴儀である。願文はその枢要として披講される。法会の時空間そのものを荘厳し浄化する言語宇宙としてあった。匡房はこの時、六十七歳、前年に権中納言から大宰権帥に再任されるが、老病を理由に自邸に引きこもっていた。匡房は願文を書いたものの、この法会にも出仕していない。実兼によって『江談抄』が筆録されるのも、こうした晩年の時期にかさなるであろう。『江談抄』では匡房が願文の対句を書きためていことが語られる。このことは、堀河院追善の六七日供養の願文を依頼もされないのに勝手に披講してしまい、周囲の響をかう話とも対応する。

ここで願文の具体的な表現について一瞥しておこう。願文の文体に関しては、中世の良季編『王沢不渴抄』に『本朝文粹』所収の追善願文を例に十番の構成が明示される（『真福寺善本叢刊』所収、叡山文庫本）。

- 一番 四種次第（世間無常通用儀・孝行儀・仏法讚歎・悲嘆哀傷）
- 二番 聖靈平生生存之様
- 三番 病中之様
- 四番 逝去之様
- 五番 悲嘆事
- 六番 日数事
- 七番 修善仏経事
- 八番 時節景気事
- 九番 昔因縁事
- 十番 廻向句事

あくまで後代に規範化されたもので、前代のそれがすべてあてはまるわけではないが、そのおよそはこれでたどれるであろう。概要はここに集約されているとみてよい。劈頭は一般的、総論的に提起し、追善の対象者の生前平静と病氣、死去の様子、残された者の悲嘆、追善の日数、供養の經典や仏像、法会開催時の景氣、景物、故事因縁との対応、一切衆生救済への祈願という展開である。細部の差異はあるものの、追善願文の構成はおおよそこういうかたちになる。

この堀河院七七日追善供養もほぼこれに準ずる。ここでは残された者の悲嘆をうたいあげる絶唱の部分をおこう。

椒房月暗、妬梁燕之双栖。 椒房月暗く、梁燕の双つの栖を妬む。  
 蘭殿燈銷、傷隙駟之難遂。 蘭殿燈銷え、隙駟の逃げ難きを傷む。  
 虚空落涙、秋草霑而露寒。 虚空に涙落ち、秋草霑いて露寒し。  
 山野含悲、紅林摧而風咽。 山野悲しみを含み、紅林摧いて風に咽ぶ。

（『六地藏寺善本叢刊』、訓読は私意）

主を失った宮殿は暗くさびしく、梁のつがいの燕さえたましく、馬が瞬時に通り抜けるのを隙間から見るようなはかない人の世の無常が嘆かれる。空は時雨れ、秋の草は露にぬれて寒々しく、山野も悲しみの色どりに包まれ、紅葉の林を風が揺るがし、むせぶように吹きすぎてゆく。

この願文の白眉ともいえる一節で、残された者の嘆きが宮中の夜の荒涼たる様や晩秋の山野の情景に託して切々と綴られる。晩秋の九月七日という法会の景氣に即した景情一致の四六駢麗文である。この対句が法会場で朗々と唱えられるわけで、聴聞の衆は悲涙にむせんだに相違ない。追善願文はまさに「主情的な抒情形式の哀傷文学」（渡辺秀夫）にふさわしいといえる。願文構成の「悲嘆事」と「時節景気事」を一体化したような哀切な表現である。

これに類する対句に以下がある。

玉管抛而委塵、震遊無帰日。 玉管抛つて塵に委かせ、震遊帰る日

なし。

琴絃断而倚壁、良宴亦何秋。 琴絃断つて壁に倚り、良宴また何れの秋ぞ。

堀河院が笛の名手で、琴をはじめ舞楽などひろく芸道に通じていたことはよく知られている。往事の華麗な雅苑が追想され、もどらぬ日々を慨嘆し、主を失った楽器にことよせて喪失感をつのらせ、悲嘆哀傷が強調される。この願文にはとりわけこうした哀悼の表現が場に即してくり返されるのが特徴である。

また、

諳鷺嶺之教半部、大漸之日自誦蓮偈。

鷺嶺の教えを諳すること半部、大漸の日、自ら蓮偈を誦す。

書鷺池之典三帙、妙迹之露纒殘花文。

鷺池の典を書くこと三帙、妙迹の露、纒かに花文を残す。

『法華経』を半分ほどそらんじ、臨終の時に偈を唱え、『法華経』を三帙ほど写し、筆跡を残した。この対句は、先に見た『中右記』や『讚岐典侍日記』に記述される内容に合致する。堀河院の臨終時の様子は、おそらくすぐに噂としてひろまっていたのであろう。願文構成でいう「逝去之様」「聖霊平生生存之様」などに近い。

光沈響絶、楽尽哀来。

光沈み響きは絶え、楽しみ尽きて哀れみ来る。

所幸者北山之南偏、陵松未拱。

幸するところは北山の南偏、陵松はまだ拱さず。

所望者西土之上品、蓮台已開。

望むところは西土の上品、蓮台すでに開かんとす。

至孝不修之悲、顧姑射而遺恨。

至孝不修の悲しみ、姑射を顧みて恨みを遺す。

克己複礼之行、到仏国而有何疑。

克己複礼の行い、仏国に到ること

何ぞ疑いあらんや。

「陵松」は陵墓に植える松で、七七日ゆえまだ成長していないことをいう。「上品」は西方極楽浄土の最上位をいう。眼前の亡骸を葬る陵墓の様と見えない極楽往生の蓮台とが対比される。親に先立つ不孝を嘆き、宮中を顧みて恨みに思い、克己複礼の行いにより、浄土に生まれ変わることをどうして疑えようか。この世に想いを残しつつも来世の往生は疑いないことが確約される。以下、ほかの箇所は割愛せざるをえないが、結末は「乃至法界平等利益」という廻向句で結ばれる。今は亡き人の追善供養にあやかっつて一切衆生の救済をこいねがうのが常套であった。

現世と来世、生前と没後、逝ってしまった死者と残された生者の対比を軸に、死者の善提をとむらい、あわせて残された者の悲嘆を共有し確認しあい、救済を願う表現指向で一貫する。そのような願文が法会という儀礼の場に供されることで、その場はことばで荘厳され浄化しつくされ、法会遂行者と聴聞衆との一体化した時空間が創出される。したがって、願文は書かれた文章としてのみあるのではなく、法会に開かれた声としても読まれなくてはならない。しかも、それらの表現は聴衆の心の琴線にふれることで、法会以後も印象をとどめ、記録され、記憶されて外部にもひろまっつてゆく。一回的な個別の時と場を超えた普遍性をも獲得するといえる。儀礼の場に収斂する面と同時に固有の場から超出する面をももっているのである。

金沢文庫蔵・二十二巻本「表白集」にも、乳母の大式三位による「御乳母大式三位奉為堀河院修御追善表白」（恵什阿闍梨の作）があるが、ここでは割愛する。

#### ④ 安徳天皇の誕生をめぐつて—出産儀礼の縮図

ついで王の誕生儀礼の例として、誕生儀礼の史料を比較的よく残して

いる、治承二年（一一七八）、安徳天皇の生をみてみよう。ここには、古記録として中山忠親の『山槐記』や平信範の『兵範記』（治承二年条逸）があり、いずれも宮内庁書陵部蔵伏見宮本『御産部類記』（鎌倉期写、『図書寮叢刊』所収）に抄出され、『平家物語』にも語られることはよく知られている。これらが依拠したものには御産記録があり、さらに一般にはあまり注目されていないものに法会唱導で名高い安居院の澄憲の表白もある。これらを並べてみるとどうなるか、以下に俯瞰してみたい。

まず『山槐記』であるが、『公卿補任』によれば、中山忠親は時に権中納言、四十八歳、右衛門督、檢非違使別当で、七月二六日より中宮権大夫を兼任、平時忠が中宮大夫になっている。以下に関連記事を列挙する（史料大成）。史料大成本では七月と九月条が欠けているが、『御産部類記』にはみられるので、補った（但、十一月以降はない）。

治承二年（一一七八）六月二十八日

中宮徳子、御年二十四、六波羅入道前太政大臣二女、母贈左大臣時信公女、二品時子尼、

御懐妊、当五ヶ月、仍有御着帯事、初度也。

閏六月十一日 中宮物氣不快 高倉院他所へ臨幸

十九日 金剛童子供

二十三日 千度祓

七月十三日 御産調度始

十六日 中宮受戒

二十七日 中宮、丹青膏服す

八月 二日 七仏薬師造始 御産定 承暦三年の堀河院誕生の先例

十六日 御産御祈 大般若読経 導師澄憲

十八日 賀茂千度詣

二十一日 貴船社神楽

二十四日 御産御祈勅使発遣

二八日 芳光仏供養

二九日 御産鳴弦料

九月一日 大般若読経、愛染王法

二日 清盛、般若心経三千百三十二巻供養（日本の神明の員数）

五日 千手法、不動法

十日 御産土祈開始 薬師経、千手経

十三日 千度祓、物気渡し 薬師法結願

十四日 中宮密々入内

十七日 公家、十社奉幣

十九日 放光仏供養

二十日 五壇法

二十三日 円雲、呪水献上

二十五日 泰山府君祭

二十九日 放光仏供養

十月一日 中宮御産御祈被<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>御読経<sub>一</sub> ↓法華経、最勝王経、観音

経、寿命経

三日 中宮御産御祈御修法 ↓八字文殊（仁和寺任覚）、准胝仏

母（醍醐寺隆賢）

七日 法皇密有<sub>二</sub>御幸<sub>一</sub>、護身宮 着帯日から四壇供（聖観音、

十一面、大威徳、北斗）

八日 平基親作『御産次第』

十日 千度御祓 陰陽師、泥塔二万五千基供養 導師全玄、経盛、

御産御祈 不動像供養 冥道供・焰魔天供祭文 二壇供（延

命、聖天） 賀茂社神楽、法華八講

十一日 法皇密々御幸、護身 転読化城喻品

十四日 北政所、御産御祈 不動供養、伊都岐島別宮神楽 清盛沙

汰、陰陽師 泰山府君祭

- 十五日 百座仁王講 御産御祈  
十六日 五壇法軍荼利 尊星王護摩祭文 五大尊像  
十七日 伊都岐島別宮神楽 知盛沙汰  
十九日 大般若転読 新日吉 里神楽 清盛沙汰  
二一日 中宮 仏供養 愛染王 薬師法 冥道供祭文 松尾社、平野社、住吉社 仁王講など  
二二日 中宮心地違例、反吐 来月十二日御産之由 御物氣  
二五日 孔雀経法 七仏薬師法 不空羼索法  
二七日 法皇密々御幸 法華 六観音像 御物氣 房覚 奉祈皇子誕生佐宮 大神宮、熊野 千手法  
二八日 院 不動供養  
二九日 放光仏供養 稻荷社、祇園社、百座仁王講  
十一月一日 平野・春日祭 御祓  
七日 随求陀羅尼供  
八日 泰山府君祭 七所  
九日 孔雀経法、七仏薬師法  
十日 八女田楽  
十二日 寅刻 連絡 御産気 孔雀経法(仁和寺守覚)、七仏薬師法(延暦寺覚快)、尊勝法(兼豪)、准胝法(醍醐寺隆賢)、降三世(豪禅)、東寺任覚不参、摺牛王献上 件水女房奉塗御腹、読経衆群参 大般若、法華、最勝、薬師、観音、千手、寿命経、陰陽頭賀茂在憲、参入、典薬頭和氣定成、参入、読呪 近習女房、白装束 御産時青色御衣 陰陽師参入 安倍泰親ら 御祓 御卜 卯辰未申辺り御産か。法皇密々臨幸、伴僧の陀羅尼等、その「声成雷」。公卿以下、群参、使祈願へ 摺経 白布 神社四十一ヶ所(石清水、賀茂上下(略)、伊勢なし)、仏寺七十四ヶ所(東

大寺、興福寺(略)、等身十二面(右兵衛督)、不動(白川殿)、六字(白川殿女房冷泉局)、薬師・不動(内大臣)供養、御剣(清盛)、馬(内大臣重盛) 大神宮他。立願願書(石清水、平野、日吉) 法印全玄 平基親 樺一枝。宿曜師・大威儀師珍賀、退出 北斗堂へ(清水坂)、御卜、七仏薬師修法中、免物事(大赦)。「今度免物、大概依七仏薬師也」。内裏使、連綿不絶。

午刻 仁和寺宮参入 孔雀羽持参 後日仰、独鉦か五鉦か已刻 御衣 誦経 御卜。陰陽師泰親 ただ一人「只今可令遂給也」(他は子丑刻とする)。散米当障子声頻、重衡・維盛参入母屋簾中、撒弘筵、打御物氣之間、其声不聞。開東門、此事見『曆林産経卷』。

未二点、皇子降誕 女房春日局奉懸、大輔局抱御腰、洞院局近候御傍云々、替帯、内大臣重盛、誦祝詞三反「以天為父、以地为母、領金銭九十九令呪命」。九十九銭(方三寸許白生絹袋、白糸で括る、御産前に清盛献上)を枕上に置く。諸卿中門外庭上に立つ。法皇出御、今熊野へ。此間、自日陰上転甌破三分(兼破之、以麻仮結之、落後為令破也。(略)而誤落北方、不足言事也)。かつげ物 験者五人簾中から外へ孔雀経修法持続。典薬定成、献御乳付雜具、甘草湯、蜜和光明朱、牛黄 料理、御薬雜物等、石燕二(定成進呈、清盛一对献上、其体白石、似燕槽、其程如大柑子、海馬六、鼯鼠皮一枚、鰓皮一枚、弓弦一筋、馬銜毛(大半は清盛の献上)。基親、陰陽師を召し勘せしめる。勘文遅々、乳付以下、沐浴や着衣、剃髪の日時、決定。臍緒切る。先御産成了。安倍資忠、河竹持参(口径一寸、長六寸)、重衡作竹刀、洞院局、練糸で臍を結び、重盛が竹刀で切る。御胞



衣、有御乳付事。伝聞、洞院局奉抱上、以綿纏指、拭去御口中并御舌上血、血多入御口中不速泣給云々。

以他綿纏、沾取甘草湯奉含之、朱蜜、唇に塗る。牛黄含ませる。合御乳（洞院局は六月に出産、当時は乳汁出ず）。

御乳人參上（故近衛大夫通清女、右近将監親房妻）、御鼻員以練糸結之如恒。皇子入御帳中、彼御方奉抱之、即還御（故建春門院御弟、中宮外姨母）、内大臣以下、束帯に着替え。今夜御劍渡し。孔雀経、七仏薬師等法結願、皇子降誕奏上。申刻内侍、取劍、被奉請呵梨底母十五童子、五壇法留七ケ日。金輪（涪源）、薬師（実詮）、千手（房学）、不動（俊堯）、六字（全玄）。今夜七ケ日修供。二壇白衣被追物氣事。台盤所女房白装束。

〔十二月 欠〕

治承三年正月

四日 東宮御載餅

六日 東宮御五十日

以上、日並みで魔除けの散米、うちまきや唇に蜜を塗ること、重盛が臍緒を竹刀で切るさまなど事細かく記述される。平基親が『御産次第』の記録を書いており、これらがこうした日記の基礎資料になっているのである。東門を開く故事が『曆林産経卷』によることも示される。また、密教を主とする権門の高僧の加持祈祷や神仏祈願、陰陽師、医師等々、可能な限りでありとあらゆる部署の人材が総動員されており、さながら一大イベントと化しているさまが展望できる。

甌を破り、誤って北に落としたことが明記され、「不足言事」とされるが、後の『平家物語』で「あやし」「あしき事」とする。

ついで『兵範記』は六月三日〜八月八日条がみえ、『山槐記』とほぼ

等しいので省略する。

## ⑤『平家物語』から

『平家物語』は諸本が多く、テキストごとに微妙に相違するので、代表的なものを掲出し、メモとしてまとめておく。

A 延慶本『平家物語』二・本（勉誠社）

春の暮れより御乱心地

六月二十八日 着帯

物気とりつく↓讚岐院怨霊、悪左府頼長、成親、西光ら怨霊、

成経・康頼・俊寛ら生霊

↓大赦

十一月十二日 寅時、御産の気あり、十月二十七八日あたりから

駈者 房覚・昌雲・俊堯・豪禅・実全

内大臣 馬十二疋、劍七腰、御衣十二両

大赦先例 大治二年九月十一日 待賢門院御産（後白河）

承暦元年 寮の馬賜る

八幡、賀茂、日吉、春日、北野、平野、大原野

御壇法 降三世 全玄

神社↓四十一所 石清水、賀茂、北野、平野、稻荷、祇園、今西宮、

東光寺

仏寺↓七十四所 東大寺、興福寺、延暦、園城、広隆、円宗寺

神馬 大神宮、石清水、巖島 二十三社

仁和寺守覚法親王 孔雀経

山座主覚快 七仏薬師法

寺長吏円恵 金剛童子法

五大虚空蔵、六観音、一字金輪、五壇法、六字河臨、八字文殊、

普賢延命、大熾盛光仏師召され、等身七仏薬師、五大尊像造る  
清盛・二位殿、呆然

成親、西光の怨霊「御産トミニナリヤラス」

法皇の声、加持祈祷「躍り狂フヨリマシノ縛共モ、少シ打シ  
メリタリ」

「何ナル悪霊ナリトモ、此ノ老法師カクテ候ワムニハ、争カ  
近付奉ベキ。何況ヤ、顛ルル所ノ怨霊共、皆丸ガ朝恩ニヨリ

テ、人トナリシ輩ニハ非ズヤ」「女人臨難生産時、邪魔遮障  
苦難忍、至心称誦大悲呪、鬼神退散散安樂生」↓御産ヤスヤ

ス「千手経」

重衡「御産平安、王子御誕生」入道・二位殿、声をあげて泣  
く↓「中タイマイマシ」

内大臣「以天為父、以地為母」金銭九十九文枕に置き、臍の  
緒を切る

故建春門院の妹「アノ御方」抱く 時忠の北方、洞院殿、乳  
母 囲碁手の銭出す

法皇、今熊野参詣「太上法皇ノ御験者ハ希代ノ例歟」  
女房、院の軽挙ささやく 砂金一千両、富士綿千両 験者

の禄として法皇へ 陰陽師泰親のみ「御産只今也。皇子ニテ  
渡セ給ベシ」サスノミコ（指すの神子）

目出たかりける事 法皇の加持 染殿后、三条院の故事  
思わずなりける事 入道 呆然

優にやさしかりける事 重盛のふるまい  
本意なかりける事 右大将の籠居

あやしかりける事 甌形を北の壺にころがし南へ落とす 姫宮誕  
生の時の様

をかしかりける事 安倍時晴のヲコ 落冠、放髻

参上の者、不参の者、諸僧 勧賞  
十二月八日 皇子親王  
十五日 立太子

B 長門本『平家物語』五（勉誠社）

基本は延慶本に等しい

法皇への京童の笑い

法皇の『千手経』加持「阿遮一睨の窓前には、鬼病手束懐、多  
齡三過床上には、魔軍かうべをふりておそる（略）」

泰親、さすのみこ

陰陽師の独自説話 推条をめぐる

安倍晴明 客の目的見分け 家の前の茸 箱の中身言い当て

泰親と時春 箱の中身は柑子か鼠か

C 『源平盛衰記』十（三弥井書店）

二位尼、一条戻り橋で橋占 十四五許の禿なる童部が十二人唱い走

る「摺は何摺國王摺、八重の潮路の波の寄摺」  
一条戻り橋のいわれ 晴明 十二神将使う 妻が「職神」（「識神」）

を恐れたので橋の下に隠して使役 吉凶の占いで識神が人の口  
に乗り移って託宣

物気 怨霊

D 覚一本『平家物語』三「御産」（新古典文学大系）

仙源（全玄） 敬白

神社 大神宮以下、二十余

仏寺 東大寺、興福寺以下、十六所

重盛 御衣四十領、銀剣七つ 馬十二疋にひかせる

「金銭九十九文、皇子の枕に置き、「天をもつては父とし（略）御命は方士東方朔が齡をたもち、御心には天照大神入かはらせ給へ」とて、桑弓蓬矢で天地四方射る

乳母 時忠の北方

勝事あまたあり

あしき御事 甌

おかしかりしは 入道のあきれざま、目出たかりしは、本意なかりしは、

以上が『平家物語』の主要伝本にみる一節である。延慶本が特に詳しい。他の資料との決定的な違いは、怨霊の記述であり、『山槐記』をはじめ他資料では「物気」とのみあり、記載をはばかられるのであろう、そこに物語としての特性がよくうかがえる。しかし、これは物語のなせる想像や空想のフィクションではありえない。この時代、物の怪の実体が怨霊であることはほぼ常識化しており、それを記述するかしないかのレベルであって、『平家物語』はむしろそこに怨霊の姿を具体的に介在させることで、安徳誕生の意味をとらえようとしているのである。保元の乱の崇徳院や頼長、近くは鹿ヶ谷事件の成親や俊寛らであり、延慶本では後者は「生霊」とされる。それらの跳梁跋扈の描写は、結末の壇ノ浦の滅亡にまで射程が届いているとみるべきであろう。

また、清盛をはじめ、周圀の者の反応や対応を細かく語り、個々の事例を列挙してまとめている。出来事への対応を通して人物像を区分けし、描き分けているのである。

細かい点でいえば、銭九十九文を枕上に置くのは『山槐記』にもみえるが、延慶本「圀基手の銭」は不明。陰陽師泰親が「今産れました」と宣言するのは『山槐記』にあるが、延慶本では皇子であることも予言する。覚一本には桑弓蓬矢がみえ、盛衰記は二位尼の一条戻り橋での橋占

まで語られる。

## ⑥ 法会唱導、修法、事相書から

ついで注目されるのは、法会唱導資料や修法などをめぐる密教の事相書の類である。まずは名高い天台宗比叡山の安居院の澄憲による表白である。『公請表白』（東寺宝菩提院旧蔵、大正大学蔵マイクロフィルム）にみる表白で、年時は記載がないが、先引の伏見宮本『御産部類記』から澄憲が導師を勤めた八月十六日の御産御祈の大般若御読経供養であることが判明した。今、読みやすいように、文章を整理して掲げる。

9 「中宮御産御祈大般若供養表白」

大日本国金輪陛下、

擬<sup>二</sup>十善之觀襟<sup>一</sup>。

運<sup>二</sup>三輪之至誠<sup>一</sup>。

因<sup>二</sup>絵尺迦如来之尊像<sup>一</sup>。

書<sup>二</sup>写大般若經之真文<sup>一</sup>。

排<sup>二</sup>九禁皇居<sup>一</sup>。

展<sup>二</sup>一日梵筵<sup>一</sup>。

御旨趣何者、

夫、十善聖運者、昔<sup>二</sup>婦<sup>一</sup>十号<sup>二</sup>而殖<sup>一</sup>其因<sup>一</sup>。

天子宝位者、今承<sup>二</sup>天帝<sup>一</sup>之讓<sup>二</sup>其德<sup>一</sup>。

故、崇<sup>二</sup>金人<sup>一</sup>、則<sup>二</sup>金輪弥添<sup>一</sup>輝。

悦<sup>二</sup>天衆<sup>一</sup>、則<sup>二</sup>天子弥久<sup>一</sup>慶。

蓋是百王之鴻台、豈非<sup>二</sup>累聖之金鏡<sup>一</sup>哉。

帰仏以<sup>二</sup>尺尊<sup>一</sup>為<sup>二</sup>其先<sup>一</sup>、忍土之教主故也。

歆天以<sup>二</sup>般若<sup>一</sup>為<sup>二</sup>其要<sup>一</sup>、鎮国之妙典故也。

今日御願、蓋存此儀。

抑、一國大幸、在儲君之誕生。

万乘深願、兼期繼體之不絶。

而今、椒房呈捫天之夢。

蘭殿告懷日之祥。

瓊樹降移於璇宮。

珠胎待慶於玉堂。

實是、三十三天之分德、欲繼天子之宝位之秋也。

故、仰弘力、祈神道、恩願念之偷通。

請諸天、求善神、誓大事之早成。

依之、囑三十力三尊之聖容。

写般若六百之真典。

先、致開講於即時。

兼、修転読於不日。

六十口薛服列袖。

六百軸花紐披卷。

如々畢竟之理、久々。

智々清浄之唱、声々。

鷺池秋水、引清流通御溝。

鷺峯古風、叩遺韻伝鳳闕。

定知、八十億諸天、降空而影向。

十六善神、分雲而來集。

因茲、十善掌上、忽呈擘璋之慶。

三宮帳下、早施国母之名。

三宝哀愍、諸天納受。

諸寺八講、法勝寺

(山崎誠「安居院唱導資料纂輯(六)」「調査研究報告」一七号、

国文学研究資料館、一九九六年)

結末は省略があるようだ。才氣走る澄憲の文体の面目躍如たるものがあるが、それほど対句に趣向を凝らしているわけではない。「椒房に捫天の夢を呈し、蘭殿に懷日の祥を告ぐ。瓊樹を璇宮に降移し、珠胎を玉堂に待慶す」の辺りに文飾らしきものがうかがえる。「鷺池秋の水、清流を引きて御溝に通す。鷺峯古き風、遺韻を叩きて鳳闕に伝う」という秋の時節景氣的な表現、釈迦の図像と「大般若経」六百巻を書写供養、僧六十口等々が「御産部類記」所引「山槐記」と合致する。ただ、図像は釈迦と多聞天・吉祥天との二幅あり、經典も新古各一部あった。導師の澄憲は仏前半帖に著し、「啓白」し、新写経題名をかけた、説法を行う。承暦三年の堀河院降誕を先例としていた。

表白のついでにいえば、金沢文庫蔵・二十二巻本「表白集」十六には、二四四「産析孔雀経説経表白」、二四五「産析孔雀経説経表白」(行任阿闍梨)など、出産祈願の表白も収録されている(「守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究」勉誠出版、二〇〇〇年)。詳細な検討は今後を期したい。

ついで、密教の修法を中心にした事相書では、安徳の例ではないが、天台系の「阿婆縛抄」と真言系の「覚禪抄」とに出産祈願の修法をめぐる記述がみえるので、それぞれ掲げよう。

「阿婆縛抄」六六「孔雀」(大正新修大藏経・図像部)

後加持呪

当今私云、近衛院 御誕生時、御室修此法給。後加持呪、極狭少。恐クハムユラキラン テイソハカノ呪歎。東阿闍梨問之、不然。経中有之云々。秘之歎。経如然小呪不見故也云々。

同・四八「七仏薬師」

為産生安穩修之

七仏経云、或有女人、臨当産時、受於極苦。若能至心称名

礼讚恭敬供養七仏如来、衆苦皆除、所生之子、形貌端正、見者歡喜。  
利根聰明、少病安樂、無有非人奪其精氣。文 本願經心同  
同 第五、行法事

次發願

至心發願 唯願大日 本尊界会 七仏世尊 御産平安 宝寿長遠  
無辺御願 皆令満足 宮内安穩 諸人快樂 乃至法界 平等利益

『覚禪抄』五「七仏薬師」(同)

除産苦

又云、有女人、臨当産時、受極苦。若至心称名礼讚恭敬供養、  
彼如来者、衆苦皆除、所生之子、身分具足、形色端正、見者歡喜。  
利根聰明、安穩少病、無有非人奪其精氣云々。

薬師驗記云、溜州有女人有身、十二月不得産。身体疫苦、骨  
髓瘡痛。挙行啼哭。沙門邁公教称薬師名。夢仏自来救、弥信随唱、  
苦漸息産男子。人皆謂希有矣云々。

同・「薬師法」

十二願妙薬 亮恵

第八薬、雄黄、等胎女帯之腹中女子、転成男子云々。

孔雀経法、七仏薬師法などに焦点があることが知られ、『薬師驗記』  
なる靈験記も引用される。

### ⑦ 御産記録をめぐる

右の出産祈願の修法に関連して、『門業記』一七二に一連の「御産御  
祈目錄」があり、安徳の例もみえるので掲出する。

『門業記』「御産御祈目錄」治承二年 (大正新修大蔵経・図像部)

六月二十八日 建礼門院于時中宮、御著帯

八月 日 六字法 全玄法印  
↓以下、九月二十日ま  
で『山槐記』なし

九月 五日 千手法 不動法

二十日 五壇法

不動 覚成法印 白河殿御沙汰

降々々 豪禅僧都 内大臣御沙汰

軍々々 兼智僧都 光隆卿沙汰

大々々 実宴僧都 頼盛卿沙汰

金々々 実印法眼 教盛卿沙汰

一字金輪 济覚法印 隆房朝臣沙汰

仏眼法 覚海法眼 女房沙汰

烏瑟沙摩 円雲法眼 讚岐寺季能沙汰

金剛童子 行暁法印 経盛卿沙汰

十月 三日 八字文殊 任覚法印

准瓶法 隆賢

四日 如意輪法 全玄法印

十日 尊勝法 兼毫大僧都

延命法 実任大僧都

冥道供 全玄法印 御祭文 永範朝臣草

炎魔天供 倫円法眼 右大弁俊経沙汰

聖天供 道意

十一日 最勝太子供 顕運

施餓鬼 道願

已上二壇本坊

二日 冥道供 実寛 御祭文 藤中納言

二四日 不空絹索法 雅実大僧都 ↓『山槐記』なし

葉衣供 仙範法眼

摩利支天供 増盛

二五日 孔雀経 守覚法親王 公家御沙汰

二七日 十一面供 覚成法印 七箇日以後結願

十一月 七日 随求陀羅尼供 円空

十二日 未刻、皇子誕生 安徳天皇

孔雀経勸賞 覚成法印任大僧都

七仏薬師々 円良法眼叙法印

とりわけ十月四日の全玄の如意輪法など『山槐記』にはみられない条があり、従来、『山槐記』と『平家物語』のみに集中していた安徳誕生の儀礼が、法会唱導など視点を变えることで、より立体的にとらえることができるであろう。『山槐記』の欠落を補いつけるわけで、きわめて資料価値が高いといえる。

誕生儀礼に関して、今後は右のような「御産記録」を視野に入れていく必要があるだろう。たとえば、「御産」の項目を国文学研究資料館の国書データベースで検索すると、一二五件あり、『統群書類従』にも、以下のテキストが収録されている。

『御産御析目録』 元永二年（一一一九） 建武四年（一一三七）

寛永二年（一六二五） 奥書 〓『門葉記』に同じ

『御産部類記』 ↓『中右記』 元永二年（一一一九） 崇徳院

『康和元年御産部類記』 ↓鳥羽院

『后宮御産当日次第』 ↓平安期、院政期年号

また、前引の伏見宮本『御産部類記』では、仁和元年（八八五）の醍醐帝から弘長二年（一二二六）の貴子内親王までの記事が各種古記録から抄出されている。

これらによる限りでは、やはり院政期に画期があるようだ。先に天皇の死をめぐる院政期の特徴が浮かび上がってきたのと同様に、御産記録が院政期からあらわされるか、もしくはこの期に集中するとすれば、誕生儀礼の面からも院政期に前代と画する変質があったとみることができらるだろう。

以上、今はあらあら概要にふれるにとめざるをえないが、問題点を洗つておくと、

1 法会仏事、修法などの具体

2 各儀礼の意味するものと時代相

3 対象資料の範囲

などがあげられる。資料としては、

法会次第法則書（『守覚法親王の儀礼世界―仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究』勉誠社、『真福寺善本叢刊』臨川書店）

法会唱導資料 願文・表白・諷誦文 各種『願文集』『表白集』、安

居院『転法輪抄』『言泉集』『釈門秘鑰』

密教事相書『覚禅抄』（真言）、『阿娑縛抄』（天台）

御産資料 部類、次第、法則、作法、拔書、問書

医学・薬学・本草書『医心坊』『重宝記』

等々が範囲となるだろう。多くは今後の課題として残されており、他日を期したいと思う。

参考文献

- 渡辺秀夫 『平安朝文学と漢文世界』（勉誠出版、一九九一年）  
谷口広之 「指すの神子と推条口占説話―伝承文化論への視座」『説話・伝承学』三号、一九九五年）  
杉立義一 『お産の歴史』（集英社新書、二〇〇二年）  
齊藤研一 『子どもの中世史』（吉川弘文館、二〇〇三年）  
小峯和明 『院政期文学論』（笠間書院、二〇〇六年）  
「法会文芸の提唱―宗教文化研究と説話の〈場〉」『説話文学研究』三九号、二〇〇四年）

（立教大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）  
（二〇〇七年三月三〇日受理、二〇〇七年九月一四日審査終了）

## **Rites and the Literature of Buddhist Memorial Services in the Life and Death of Emperors : Deaths at the Horikawa Palace and the Birth of Emperor Antoku**

KOMINE Kazuaki

This paper examines rites associated with the life and death of emperors during the 12th century, related written records and prayers and invocations recited during Buddhist services. Information on deaths that occurred at Horikawa palace is taken from the diaries of Kampaku (chief advisor for the emperor) Tadazane, the diaries of court women and the prayers of Ooe no Masafusa. From these a study is made of the meaning of the expressions of prayers recited during memorial services. Using the birth of Emperor Antoku as an example, this paper examines the diaries of Nakayama Tadachika, the books of the Heike Monogatari, the invocations of Agui Choken, writings on esoteric Buddhism, records of his birth and other materials.